Library and Information Science No. 13 1975

ライブラリー・カレッジ覚え書

Introductory Note on Library-College

佐　藤　貞　司
Teiji Sato

Résumé

Library-College is a concept that the library, instead of the classroom, is the most important component in college education, and a movement to realize this concept developed in the United States of America, where the library has been assumed as the center of the campus.

Turning to the present state of the college library in our country, it has not yet attained full growth in its system and services, and is struggling to emerge from convention of long standing, while the college itself also is undergoing difficulties in improving its constitution. Under such circumstances, the college library has been forced to innovate in its services. At this very time, it is significant for Japanese librarians to understand the concept and movements of Library-College.

The purpose of the present paper is to introduce to Japanese librarians and to give easy access to the basic literature of Library-College studies. The writer selects fundamental books and journal articles on the Library-College and reviews them in the following 5 sections of the paper: 1) introduction or approaches to the Library-College, 2) thoughts on the Library-College, 3) the Library-College and teaching methods; individual learning, 4) the Librarian-Teacher, and 5) critical comments on the Library-College.

I. ライブラリー・カレッジへのアプローチ
II. ライブラリー・カレッジ思想
III. ライブラリー・カレッジの教育方法：自主学習
IV. ライブラリアン・ティーチャー
V. ライブラリー・カレッジ批判
おわりに

佐藤貞司：北海道教育大学附属図書館参考係長
Teiji Sato, Head, Reference Services Section, Library, Hokkaido University of Education.

I. ライブラリー・カレッジへのアプローチ

ライブラリー・カレッジ (Library-College) は，1960年代初頭にアメリカで形成された思想で，高等教育段階の学習過程では，図書館こそが決定的な役割をになうべきであるとするものであり，その実現をめざす図書館学，教育（方法）学の双方に関連する，いわゆる学際的な性格をもつ運動である。図書館(library)と大学(college)をハイフンで結んだ合成語〝ライブラリー・カレッジ〟の主張は，字義どおり，大学（教室）と図書館の融合・合体を説くものであり，通常でも図書館なしの学習は考えられないとされるアメリカの大学教育の現状を，さらに大胆に革新しようとするものである。

この思想・運動は，アメリカ固有の高等教育制度リベラル・アーツ・カレッジ (liberal arts college) のプログラムを，図書館中心のそれへと変革することをめざして成立したものであるが，このカレッジと日本の(単科)大学とは，かならずしも同義ではない。また，イギリスのそれが，むしろ学寮を意味するように，歴史的に形成されたそれぞれの国の高等教育制度の，いわば風土的な相違を想起しながら，あえてライブラリー・カレッジを今日のわが国でとりあげ，検討しょうとする視点・意義はどこにあるのであろうか。

1968～69年のあの全国を席巻した〝紛争〟を経過した後，わが国の大学は本質的な変革を迫られつつある。本来，学生の教育と学術研究とを等しく目的とするはずの大学が，現実的には研究により比重がおかれ，教育の側面が軽視されがちであったことの反省という形で，そのあり方が問われているともいえるのではなかろうか。〝紛争〟に対応した各大学の〝改革案〟や各方面からの大学改革への提案は，その例証となるものであるが，そうした反省のひとつの組織的・制度的な証左として，教育研究団体が〝大学教育〟をテーマに研究組織を発足させ，また，国立大学にこのためのセンターが置かれたのも，ともに〝紛争〟後の1970年であったことを指摘しておきたい。[1]

このような時代背景と，〝現在の大学は学校である〟という前提に立って，今日のマスプロ化した大学の〝小定員大学への改造〟と〝教育と研究の分離・再編成〟を説く海後宗臣氏の主張[2]や，学生の教育こそ大学の本来の使命であるとして，〝大学は何んであるべきか――教育課程（カリキュラム）から図書館学まで――〟を論じ，新しい〝大学学〟を体系づけようとする今田竹千代氏の提言[3]などを念頭におきながら，このライブラリー・カレッジにアプローチする視点と意義を，筆者はすでにライブラリアンとしての立場から提起したことがあり，その基本的な方向づけは，変更を要しないであろう。[4]

ところで，ライブラリー・カレッジは，そのようなアクチュアルなアプローチに耐えうる質的な内容・体系的構成をもつ思想・運動なのであろうか。この問いに対する回答は，この思想・運動の内容そのものを検討し追体験することから見出さねばならない。ここでは，その発生地アメリカでは，すでにひとつの思想・運動として市民権をえており，実際的な成果も生れつつあるという事例を指摘しておきたい。

すなわち，1975年6月と8月の2期にわたって University of Oklahoma で開催された Workshop on the Library-College は，アメリカ全土から学生，教師，ライブラリアン，メディア・スペシャリスト，大学の行政当局者たちが参加し，ライブラリー・カレッジ思想をライブラリー・カレッジ方式で研究するものであった。この workshop は，この大学の summer session の正規のコースに充当され，履習学生には全土のどの大学にも通用する大学院課程の正規の2単位が認められた。[5] また，ライブラリー・カレッジをテーマとし，利用可能なあらゆる媒体を用いることによって，人間はより効果的に学ぶことができるという，ライブラリー・カレッジ思想の基本的な考えを実践したユニークな学位論文も執筆され，高い評価と注目を集めている。[6]

つぎにわが国におけるライブラリー・カレッジのとりあげられ方について概観しておこう。関係文献としては，はやくも1968年に，この思想・運動の基本文献のひとつである R. Jordan の浩瀚な論稿が翻訳・紹介されており，[7] 1973年には熊本商科大学図書館の杉本冨士夫氏が，ライブラリアンの地位と待遇如何という問題意識から，これへのアプローチを試みている。[8] また，筆者は国立大学図書館職員研修・東京大学図書館情報学セミナー（昭和49年度第1期）における個人研究テーマをこれにあてた。[9]

管見のかぎりでは以上のとおりであり，ライブラリー・カレッジは，わが国の大学図書館界において，全く未知の分野ではないにしろ，わが国独自の研究史が形成されるほどのテーマとはなっていないのが現状である。後述するように，この思想・運動のもつ重要性・課題性を考えるとき，ライブラリアンばかりでなく，より広汎な大学関係者の間に認識され研究されて，それぞれの分野

で応用・摂取される日の近いことを願わずにはいられない。

本稿の目的は，ライブラリー・カレッジ研究のための基礎的な文献へのアクセスを容易にすることにある。現在アメリカでは，これに関するかなり多くの文献が公にされており，bibliography はすくなくとも3種は公刊されている。[10] 本稿では，対象をこの思想・運動の専門誌，*Learning today;* an educational magazine of library-college thought[11] 収載論文の主なものにかぎり，次章以下でその主要なファクターごとに紹介することとし，他の文献は必要に応じてその存在を指摘するにとどめた。

II. ライブラリー・カレッジ思想

ライブラリー・カレッジ思想とは，1930年代に Louis Shores (当時 Library School, George Peabody College for Teachers) が，リベラル・アーツ・カレッジの改革案〝ライブラリー・アーツ・カレッジ〟で主張した，〝図書館がカレッジに対するはカレッジが図書館に対すると同様だという考え (the conception of the library as the college and the college as a library),〟[12] あるいは〝A college is a library, and a library is a college, that institutions is a Library-College〟[13] と定義されるその考えを実現しようとして主張される様々な考えを概括したものである。もとより，こうした考えのそれぞれの提唱者たちの経歴，大学での地位・身分は一様ではなく，従って，これを主張するときの力点のおき方，それを展開するときの文脈の構成も多様であり，library-college concept, ——idea,——philosophy, ——thought, 場合によっては philosophy of library-college concepts, などとよばれる。

本章では，それぞれがどのような認識に立って，ライブラリー・カレッジ思想を主張しているのか，その考えの背景をさぐるため主な論文をとりあげてみる。

1. Gaylor, Robert. 〝The philosophy of the last frontier,〟 *L-C.* J., vol. 2, no. 3, summer, 1969. p. 35-40.

R. Gaylor. (Reference Librarian, Oakland Community College Library) の最後のフロンティアの哲学〟は，もっぱらライブラリー・カレッジ思想そのものを論じた *Learning today* 誌の最初の論文である。

アメリカ史の知見を引くまでもなく，フロンティアはアメリカ国民にとって，単なる辺境を意味するのではなく，その克服に全力を投入すべき対象なのであり，これに対する働きかけが社会発展の源泉となるものである。ここでは，ひとりの人間をいかに最もよく教育するかという課題こそが，開拓しつくされた西部，そして緩慢であるが着実に征服されつつある宇宙 (space frontier) につぐ，アメリカにとって今日的な意義のある最後のフロンティアなのだというのが，彼の主張の前提である。

このような観点に立って，R. Gaylor が第一に注目するのは，教室における個人の多様性 (the range of individual differences in classroom) であり，それ故教師の主たる機能は，学生が自からにふさわしいあらゆる有用な resources を発見し，能率的に利用できるよう動機づけをし，はげまし手助けすること，すなわち，〝教育者の最も重要な責任は，学生がいかに学ぶべきかを学ぶのを援助することである (educator's most challenging responsibility is that of helping the students learn how to learn),〟というのが彼の考えの根幹にあるものである。

このような教育観——学生・教師・教材観は，ライブラリー・カレッジ思想に共通するものであるが，この観点から，彼は大学教育界の現状——学生を必要悪 (necessary evil) としてとらえ，従って，教えることになんの関心ももたず，大学院学生・同僚・大学当局に対しては，研究論文を通して自分を印象づけようとする教師——を批判する。そうした現状を改革し，教育というフロンティアを開発するために，彼は人間が利用することのできる全てのものを包含する図書館 (all-encompassing library) という考えを提示する。

2. Christ, John M. 〝Problems in understanding the library-college philosophy, *L-C. J.*, vol. 2, no. 4, fall, 1969. p. 29-34.

J. M. Christ (Librarian, Rochkrust College Library, Kansas City) の〝ライブラリー・カレッジ思想理解における諸問題〟は，あらゆるライブラリアンから歓迎されるはずのライブラリー・カレッジが，提唱されて30年余を経過した今日においても，そしてこれが大学図書館のあるべき理想像〝大学の心臓 (the heart of the campus)〟となるための，唯一の組織的な試みであるにもかかわらず，かれらから受入れられないのは何故かというユニークな観点から，ライブラリー・カレッジ思想をどのように理解すべきかを論じている。

彼は，その主たる理由を，この思想を理解するためには，ライブラリアンの職業原理 (professional philoso-

phy) の高度に理論的な再構成を必要とするが，かれらが身につけている philosophy は，あまりにも日常業務指向 (practical orientation) なものであり，これに要する分析的思考を欠くためとしている。

第2の理由として，ライブラリー・カレッジは，次章でとりあげるように，自主学習 (independent study) を基本的構成要素 (key element) としているが，これは教育学史のうえで明確な位置づけがなされておらず，従って多くのライブラリアンは，これを教育思想とはみなさず，教育技術上の問題とみなして，自からが関与すべき分野と理解していないことを指摘している。

彼がつづいて検討しているのは，図書館の機能についての問題点であり，図書館一般がサーヴィス機関とされるなかで，とりわけ大学図書館が，学生の教育という大学本来の機能から，附随的で副次的で補足的でそして脇役的な機関とみなされるが故に，あるべき姿としての大学のセンターとか大学の心臓というテーゼが成立していることを指摘している。教育という機能を図書館がひきうけるならば——それがライブラリー・カレッジなのだが——大学図書館のあるべき理想像としての大学の心臓論は成立しないという，これを彼岸にみて，現実の埋められぬギャップに逆に安住しがちなわれわれにとって，刮目すべき主張をおこなっている。

3. Shores, Louis. "If I were president of a junior college," *L-C. J.*, vol. 3, no. 2, spring, 1970, p. 35-42.

ライブラリー・カレッジ思想の最初の提唱者 L. Shores (Dean Emeritus, School of Library Science, Florida State University) の"もし私が短期大学の学長であったなら" と題するこの論文は，彼の高等教育観を示すものである。彼は，だれもが高等学校以上の教育を受ける機会を持つべきで，これを保証するのが，アメリカの短期大学 (junior college) であるとし，このような大学の発展がアメリカを史上初めて高等教育が普遍化した国にすると考えている。そして，優秀な学生を教育することは容易なことであるが，困難なのは優秀でない中途退学者たちを救いあげ，彼らの才能を見出し，のばしてやることだという高等教育における反エリート主義の立場に立っている。

この観点から，どのように教育を個性化できるか (how instruction can be individualized) が，第一の課題となるのであり，その課題のにない手として，自からを学長になぞらえて，高等教育の革新——ライブラリー・カレッジの実現——を構想している。その際，重要な意義をもつのが，彼の generic book という考えであって，これはすでにわが国にも"広義の図書" として紹介されている。[14] 人間が"よむ" のは印刷された文字だけにかぎらないのであって，歴史を通じて，人間はこれまで自然現象やもろもろの事象を，数多くよんできた。そして，これらをよむこと，すなわち，学ぶことを通じて人間は知識を獲得してきたとする。

このような意味合いで，よむことのできるものの総体，あるいはコミュニケートできるその媒体の総体が，彼の generic book であって，これこそが個人の能力関心の多様性に対応しうる materials なのだという。これにつづいて，彼は，この generic book による自主学習方式にもとづく，教育の構成のしなおし (reorienting) を展開している。[15]

4. Hostrop, Richard W. "Learning and the library-college," *L-C. J.*, vol. 4, no. 2, spring, 1971, p. 35-41.

ライブラリー・カレッジは，現行の画一的な学校教育のあり方に対する批判，その改革のために提起されたものであるが，R. W. Hostrop (President, Prairie State College) の"学習とライブラリー・カレッジ" は，批判されるべき画一性とは，いかなる側面なのかを理解するうえで意義ある論文である。彼が指摘するのは，現在の学校教育 (mass education) が，学生の欲求や必要性に適合してゆくシステムとしてあるのではなく，むしろ固定したシステムに学生を適合させるプロセスとしてあることである。それは，単位制のもとであらゆるところにみられ，教科の履習については，たとえば国語と数学をマスターするのに同じ時間数を要し，また職業教育の面についても，全く異質の，たとえば会計士や建築士や教師のための教育が，同じ時間数を必要とするシステムになっていることなどにあらわれていて，"アメリカの教育はおどろくべきことをやっている (The American education is doing the miraculous job.)" というのが彼の見解である。わが国においても，どの学生も同じレベルからスタートし，同じ修業 (exercise) を通じて同一時点で修了するものと前提されているが，ここに疑問を提起するところから，ライブラリー・カレッジへのアプローチがはじまるといえよう。

この観点から，彼が次にとりあげるのは，"教室" という状況設定であり，そこで主役を演じているのは教師であって，学生ではないということ——それは，ひとつのパラドックスであるという。学生は受身の聞き役 (passive listener) から積極的な学び手 (active learner) と

なるべきなのであり，そのため教師は学生が学ぶための多様な materials (multi-media) について，可能なかぎりの工夫をこらすべきであり，その materials をめぐる彼独自の概念〝teacher/librarian〟のあり方が，そのライブラリー・カレッジ論を構成している。

5. Robinson, Thomas E. 〝How strong our foundation?〟 *L. T.*, vol. 4, no. 4, fall, 1971, p. 20–27.

ライブラリー・カレッジは〝an academic institution in which the library plays a central role in the instuction offered by librarians and professors in a teaching partnership〟と定義されるが，これに包括されるものはあまりにも広範であり大きすぎる。このためライブラリー・カレッジはその実践の機会を見い出せずにいる。それ故，明確な，慎重に分析され，かつ恒常的に強化された基盤のうえにライブラリー・カレッジ思想を基礎づける必要があるというのが，T. E. Robinson (Director of Secondary Education, Ricler College) の〝われわれの基盤はどれだけ強固か〟の題意である。

彼は，ライブラリー・カレッジ思想を成長する樹木になぞらえ，そのための極めて現実的な五つの枝を論じている。その五つの枝とは，次の通りである。

1) ライブラリアン——かれらが教育過程の不可欠な本質的な部分になることを信じるなら，faculty status, faculty salaries そして faculty prerequisites を要求すべきである。

2) 教授陣——教授陣は，そのプロフェッションへの準備過程で，図書館資料とライブラリーの利用法を理解しておく必要がある。同時に，ライブラリアンは，同じ過程で faculty がどこでどのように教える技術を修得しているかを学ぶべきである。

3) 運動の方向——この運動が大きく成長してゆくためには，樹木のように根をおろさなければならず，従って初等教育にも中等教育にも根をおろしていなければならない。

4) 公認・認知——今はまさに，この思想を図書館界・教育界に積極的に発表して，その存在の確認をうけるべき時機にある。

5) 視野の拡大——これまで，学生の勉学 (work-study practice) にのみ論点を集中してきたが，レクリエーションとしての読書や読書習慣の改善についても，視点をあわせる必要がある。

III. ライブラリー・カレッジの教育方法：自主学習

これまで，繰返し触れてきたように，ライブラリー・カレッジは，大学教育における個性の尊重，学ぶものの可能性のひきだし高揚を目標とするものであり，そのための中核的な教育方法は，自主学習 (independent study) とよばれるものである。[16] これは，一般的には，われわれの〝独学〟のニュアンスをも包含し，また学校図書館界では個別学習・個別研究として夙にポピュラーなものであるが，[17] わが国の大学図書館界では，筆者の知るかぎり，全く討論研究の対象になっていない。

自主学習は，honor course, autonomous course など呼称はさまざまであるが，アメリカの一部のカレッジでは，優等生の享受する特権のひとつとして採用されていたものであるが，[18] ここでの〝自主学習〟は，単なる学習テクニックとしてではなく，また，特定個人に採用されるものでもなく，あくまでもライブラリー・カレッジという institution を前提とするものであり，これを理解しておくことは，ライブラリー・カレッジを理解するために不可欠である。

関係文献としては次のものがある。

1. Shores, Louis. 〝The medium way,〟 *L-C. J.*, vol. 1, no. 1, winter, 1968, p. 10–17.

Library-College Journal 誌の創刊号巻頭を占める L. Shores の論文〝普通の様式〟は，自主学習についての彼の考えを展開するうえで，これがあたりまえの普通の様式なのだという意味あいと，前章でふれた generic book, すなわちよめるもの，コミュニケートできるものの総体という考えの背景をなす，コミュニケーションの媒体 (media; いうまでもなくこの単数形が medium) に注意をむけた〝媒体（による）様式〟の意味をも，題意は包含しているのであろう。

新しい学習様式としての自主学習は，第二次大戦後の教育における量の問題を，1960年代までにようやく解決し，アメリカの高等教育がつぎにたちむかう，質の向上という課題にとって，不可欠の手段であると彼は主張する。このような視点から，学生に自主学習を保証するうえで，資料（彼のいう generic book) に通暁しているライブラリアンの，教師に対する優位性を説き，このときかれらに要求されるプロフェッショナルな役割を詳述することを通じて，彼の〝自主学習論〟がのべられている。

2. Leuba, Clarence J. "Thoughts on an ideal college," *L-C. J.*, vol. 1, no. 1, winter, 1968, p. 38-49

Antioch College の心理学者 C. J. Leuba の"理想的カレッジに関する考察"は，自習学習を理解するうえで恰好の論文である。

教育は，教えることと学ぶことの二つの機能が統合したものであるが，しかし，それを成就させるためには，おそらく，ALA のモットー"適書を適者へ適時に(the right book to the right reader at the right time)"を念頭においてであろうが，"Different people at different rate and at different times during life"であると Leuba は主張する。彼にとって，単位制，学年制，そして定められた年限で卒業という態勢下で，教えることに傾斜しがちな大学教育の内容，方法は改革しなければならないものであり，この視点から，あるべき"理想としてのカレッジ"が構想されている。

当然ここでは，"学ぶ"という機能に考察の重点がおかれ，彼によれば，厳密には人に何かを教えることはだれにも不可能なのであって，ただ可能なことは，人が学ぶことができるよう，その対象をアレンジすることができるだけなのであり，結局，教育において"動機づけ"が最も重要なことがらであるというのが彼の立場である。

一斉に数十人の学生を画一的に教える教室の教師に"動機づけ"を期待することはできず，ライブラリアンこそが，学生との一対一のつながりをもとに，これをになう相談者 (counselor) たりえるという。

3. Postlethwait, Samuel N. "Time for microcourses?" *L-C. J.*, vol. 2, no. 1, winter, 1969, p. 24-29.

実験・実習をともなう系統立った構成をとる自然科学系の教科は，学習するうえで図書館との結びつきも稀薄であり，まして自主学習にもなじまない，従ってライブラリー・カレッジの対象となりにくいものと考えられがちであろう。Purdue University の植物学担当教師 S. N. Postlethwait の論文，"マイクロコースの好期か"は，この難問を解決しようとした貴重な実践レポートであり，われわれの自主学習理解を拡げるうえで意義ある報告である。

1961年から，植物学の学力の劣る新入生向けの補習コースとして開講されたこのマイクロコースは，いまや学生が入学までに習得した知識や植物学に対する関心や能力に無関係に，あらゆるレベルの学生に有効であることが明らかになっているという。

Audio-tutorial system ともよばれるこのコースは，植物学の履習すべき学習内容を小単位に区分し，はじめにこの小単位ごとの学生の行動目標を定め，この目標に到達するのに役立つと考えられる，あらゆる materials を実験室の 32 のブーツにセットする。この実験室は，朝7時 30 分から夜 10 時までひらかれていて，学生は都合のよい時間に利用できる。学生は，はじめ，記録カードをチェックし，指示されたブーツのひとつに入る。それぞれのブーツには，テープ・レコーダ，8ミリ映写機，実験用具，標本，顕微鏡などの materials がアレンジされており，学生はテープにふきこまれた会話調の senior instructor の指示により，この materials によって段階的に意味のある学習活動をするよう計画されている。

学生は自己のペースで，定められた目標にむかえばよく，プログラムのうち必要なところや，興味を覚えたところを自由にくりかえすことができる。そこでは，学生は教師の講義の囚われた聴衆 (captive audience) ではなく，自分で学ぶプロセスとその到達点を選ぶことができる。

もちろん，このシステムは無人化されているのではなく，人間的接触や助言を求める学生のために，いつも instructor が配置されており，さらに senior instructor による"General Assembly Session"や"Integrated Quiz Session"を含めて，このシステムは構成されているのである。そして，これらの materials に通暁しているライブラリアンとしての instructor, あるいはテクニカル・アシスタントがこのシステムを支えている。

S. N. Postlethwait の報告する，ひとつの自主学習様式としての，audio-tutorial system はこのようなものであるが，これは印刷された記録のみに収集資料を限定している図書館に対し，また同時に，ライブラリアンのあり方に対し反省をせまるものである。

4. Postlehwait, Samuel N. and Hurst, Robert N. "Minicourses; focusing on the individual and his learning," *L-C. J.*, vol. 4, no. 1. winter, 1971, p. 16-24.

"ミニコース；個人とその学習に焦点をあわせて"と題するこの論文は，S. N. Postlethwait の上述のレポートの続報にあたるもので，ここでいうミニコースとはマイクロコースと同義に用いられている。

1970 年に動物学を講ずる R. N. Hurst の着任とともに，植物学でのマイクロコースにならって，動・植物学

両者にオーバラップする分野の調整などに優れた工夫をこらし，800 名の履習学生に用意された 64 ブーツでの，audio-tutorial system による生物学ミニコースの経験，そこでの問題点，そして実験の成果およびその評価をまじえてレポートしている。

5. Roberts, Benjamin S. "A learning resources program of directed study in English communication," *L-C. J.*, vol. 4, no. 2, spring, 1971. p. 44-48.

Palm Beach Junior College では，図書館にグループ討論室，multi-media コーナーが開設されたのを機に，図書館が学習資料センターとしてどのように機能できるかについて，パイロット・プロジェクトにとりくんだ。プロジェクトの対象とされたのが，コミュニケーション学科の"グループによる論文作成コース (Non-classified Group of English Composition)" で，このコースの履習学生，担当教師，librarian-instructor の三者の話し合いで，ある時代の総合研究をテーマとすることにし，16 世紀中葉から 18 世紀中葉にかけてのバロック時代をとりあげた。

これは，学習の中心が教室にあるのではなく，図書館での directed study であり，このプロジェクトにおける librarian-instructor の役割は極めて大きなものであった。バロック時代にさまざまな側面からアプローチする学生グループに対し，目録検索や二次資料の利用法を手はじめとして，これに協力する librarian-instructor の役割についてレポートしている B. S. Roberts (Library Staff, Palm Beach Junior College) のこの論文は，人文・社会科学関係科目における自主学習の実例として，示唆に富むものである。

IV. ライブラリアン・ティーチャー

ライブラリー・カレッジは，本来大学教育のあり方にかかわるものであり，ライブラリアンよりむしろ直接学生の教育に従事している教師の側からとりあげられるのが，よりふさわしいテーマであろう。しかしながら，とかく研究に傾斜しがちな教師にそれを期待できるのは，近い将来ではないであろう。それ故，副次的な当事者であるわれわれライブラリアンがとりあげざるをえないのであるが，それは，安易な教育職の身分の欠如 (lack of status of the faculty) を解消するためのものであってはならないことはいうまでもない。

教室と図書館の融合を説くライブラリー・カレッジは，同時に従来の教師とライブラリアンの融合をも説くものであり，それは，librarian-instructor, tutor-librarian, librarian-tutor, いわゆる小・中・高校における teacher-librarian とは異なるものとしての teacher-librarian などといろいろに呼称されているが，概念的には "Librarian-Teacher" を意味する。

本章では，これに関連するものとして，どのような論文があるかを紹介してみよう。

1. Goudeau, John M. "Island of innovation," *L-C. J.*, vol. 2, no. 3, summer, 1969, p. 4.

J. M. Goudeau (Florida State University) の"革新の島々" は，アメリカのさまざまなカレッジでなされている教育革新のための実験的プロジェクトを俯瞰し，その主潮が個人学習にあることに注目し，このこととライブラリアンシップとの関連を考察している。彼は，そこでの新しいライブラリアンのパターンとして，teacher-librarian と表記せずにいられないものの出現を予想している。かれらには，従来以上に個人的なプロフェッショナルな能力が求められ，しかも教師的な役割を引きうけることが要請される。

革新されたカレッジで，かれらがどのような機能をはたすことが期待されるかについてのべたこの論文は，librarian-teacher についての一般理論として読まれるべきであろう。

2. Kaufman, Ruth A. "Design in the library," *L-C. J.*, vol. 2, no. 3, summer, 1969, p. 25-34.

ミシガン州デトロイトの Wayne State University の女子学生 R. A. Kaufman の"図書館におけるデザイン" は，この大学で図書館学を講ずる P. B. Knapp[19] の大学図書館論コースの課題レポートとして作成されたものである。

彼女は，美術教育の一環としてのデザインについて図書館における学習モデルを策定することをテーマとした。その内容をみると，一般原則としての学際的アプローチ，美術教育におけるデザイン，デザインのための理論的背景，単元，目的，必読書リスト，学習課題など広範なものであるが，そこでのライブラリアンのはたす役割を学生の立場から考察していて，librarian-teacher に関する各論のひとつとして読むことができる。

3. Douglas, John R. "The librarian-tutor in an innovative college experiment," *L. T.*, vol. 4, no. 4, fall, 1971, p. 44-53.

カリフォルニアの学生数 1 万 8 千名の San Jose State College の一部として New College と名づけられた実

験的カレッジが開設されたのは 1968 年であった。このカレッジは，中産階級が郊外に移転してしまった結果として，非アメリカ系住民の多い，市の荒廃しつつある地域に位置していたが，そうした地域性に対応し，住民構成をも考慮して，試験なしに高校中退者も含めて一学年百名を入学させたのであった。

このカレッジは，教員の人事やカリキュラム配当の決定にも学生参加を認め，男女共用寮をおくなど，管理運営上大胆な実験をおこなった。教育態勢の面でも，前半の2年間は州立大学の一般教育規準にあわせたものであるが，後半の2年間は，学生が社会に出てからの適応性を涵養することを目的に，原則として個人学習プログラムに基礎をおく現代研究 (contemporary studies) を課するものであった。

上述の理由から，学生の学力は一般のレベル以上ではなく，その個人学習プログラムを履習する場としての図書館には，必然的にライブラリアン・チューター (librarian-tutor) が必要となった。J. R. Douglas の〝革新的カレッジ実験におけるライブラリアン・チューター〟は，みずからがその任務を果した4年間の総括であり，librarian-teacher に関するる実践論として読むことができる。

4. Beswick, Norman. "Librarian and tutor-librarians; library use in British education," *L-C. J.*, vol. 2, no. 2, spring, 1969, p. 12–23.
5. Bristow, Thelma. "A reading seminar," *L-C. J.*, vol. 3, no. 3, summer, 1970, p. 13–22.

チューター (tutor) は，もともとイギリスで発達した制度であるが，librarian-teacher について理解するうえで，この国におけるチューター・ライブラリアン (tutor-librarian) についてみておくことは，間接的ながら益するところがあろう。

ライブラリー・カレッジに関心をよせる N. Beswick (Brentwood College of Education, Essex)[20] の〝ライブラリアンとチューター・ライブラリアン〟は，はじめイギリスとアメリカ両国の高等教育制度のちがいに言及したのち，イギリスの高等教育機関の3類型——大学(カレッジの集合としての旧大学と新大学)，技術専科大学，教員養成大学——ごとのチューター・ライブラリアン制あるいはチューター・ライブラリアン運動の実情を報告している。

T. Bristow の〝リーディング・セミナー〟は，Institute of Education, London University がおこなったリーディング・セミナー方式を採用しての，一年課程の現場教師の再教育による教護員養成に，チューター・ライブラリアンとして従事した際のレポートであり，その実務を具体的に紹介している。

V. ライブラリー・カレッジ批判

ライブラリー・カレッジのプログラムを完全に採用しているカレッジは，アメリカにも一校も存在しないこと，そして，第一にうけ入れられるはずのライブラリアンが，きわだった関心を示すにいたっていないことは，これに対するなによりの批判の例証であるかもしれない。

Learning today 誌の 1969 年秋季号，vol. 2, no. 4 は，次の3件を収載している。それぞれがライブラリー・カレッジのいかなる点に難点を見出しているかをさぐっておくことは，これに対する一面的でない理解を得るうえで資するところがあろう。[21]

1. Breitsprecher, Paul. "Far from the heart of things," *L-C. J.*, vol. 2, no. 4, spring, 1969, p. 12–20.

哲学者の仕事は，新しい思想をつくりだすことではなく，われわれが自明のこととしていることを，明確に論理化することであるとの観点から，ライブラリー・カレッジの基本的構成要素である図書館，カレッジ，高等教育の過程などを定義しなおし，この三者の関係を分析し，それは教育の革新ではなく，実質的には構成された経験 (structured experience) としての高等教育の否定であるとみるのが，P. Breitsprecher (Librarian, Wisconsin State University) の〝ものごとの核心から遠くはなれて〟——彼はライブラリー・カレッジをこのようにみている——の立場である。

図書館についての分析をみると，彼によれば，人間の記録された知識は，出版量の増大とともに目に見えない知識の格子模様 (latticework of knowledge) となって社会に存在するようになった。図書館とは，これに物理的に（目にみえるかたちで）接近しようとしているものであるという。

この latticework は，たとえば，書物Aと書物Bがともにトピック X を対象としているときの共有関係と，書物Cが書物Dを引用しているときの引用関係の二つのきづなによってむすびつけられており，そのむすびつきは，書誌構造 (bibliographic structure) をつくるものだという。

図書館がこの latticework に近づくということは，具体的にはコレクションを増大させるということであり，これが算術級数的に増大すれば，その書誌構造をつくりだす書誌連鎖 (bibliographic linkages) は幾何級数的に増大するという。これに対し，現実の図書館はコレクションの検索を容易にするため類似主題ごとにアレンジし，接近を容易にするためある種の索引システムのもとにおいているだけであり，書誌連鎖の圧倒的大部分を発見さえしていないという。

ここに図書館(学)の課題とライブラリアンの固有の使命を見出すことが，彼のライブラリー・カレッジにくだした評価の根底にあるものである。

2. Shahan, Robert. "The Library-College; the 'Is' and 'Ought'," *L-C. J.*, vol. 2, no. 4, spring, 1969, p. 21-25.

ライブラリー・カレッジ思想は，単位制に基礎をおく伝統的な教育方法——生硬な講義・討論で進行する教室の授業，非創造的な課題読書，旧式な採点評価法など，今日の教育に多くの学生が抱いている批判のいくつかに対し，望ましい刺激的な解決を与えるものであろう，と評価しながらも，その基本的なエレメントである図書館とライブラリアンの役割について，混乱や，すくなくとも不注意による曖昧さがみられる，とその難点を指摘するのが University of Oklahoma で哲学を講ずる R. Shahan の "ライブラリー・カレッジ；それはなんでありそしてなんであるべきか" という論文である。

彼によれば，教師は学生を図書館に送るのであって，ライブラリアンのもとに送ることはない。なぜなら，ライブラリアンはもっぱら資料の取扱いに長じているが，特定の専攻主題をきわめてはおらず，また学生を教えるようにオリエンティトされてもいない。ライブラリアンがこの役割を引きうけるためには，語の本来の意味で Librarian-Subject Specialist たる必要があるが，それは二兎を追うことを意味し，現実には存在しえないという。

3. Munn, Robert F. "The Library-College movement; a few heresis," *L-C. J.*, vol. 2, no. 4, spring, 1969, p. 26-28.

ライブラリー・カレッジ運動は，1) 自主学習こそが将来の教育方法の主流となる，2) そこでは，ライブラリアンの地位は向上する，という二つの仮説に立脚していると規定する R. F. Munn (Provost, West Virginia University) の "ライブラリー・カレッジ運動：若干の異論" は，はたしてこの仮説が成り立つかという点に疑問を投げかけたものである。そして，彼は，大学図書館が学習上現在よりも重要な地歩を得るときがあるとすれば，今日のタイプのライブラリアンは，その地位を失うだろうとしている。

おわりに

本稿で紹介することができたのは，ライブラリー・カレッジに関する4テーマあわせて18論文にとどまった。その運動史・思想史，新しい動向としての Learning Resources Center に関連するところ——それは一方では，いわゆるオープン・プラン・スクールに，他方では，いわゆる教育工学の分野とも関係しよう——，また，ここでの教師と学生の関係如何といった問題や，そこでの資料論など，欠くことができないテーマでありながら，言及できなかったテーマは少なくない。なによりも，専門誌とはいえ，*Learning today* 誌以外にも，言及すべき論文は多い。従って本稿は，わが国における本格的なライブラリー・カレッジ研究への端緒，あるいはイントロダクションとしての，ささやかな raison d'être を主張できるものにすぎないであろう。

今日のアメリカにおけるライブラリー・カレッジは，これがプログラムに全面的に採用されているケースはないとはいえ，着実な発展をみせており，さまざまなレベルにおける実践例の情報提供誌さえ，*Learning today* 誌を補うかたちで刊行されるに至っており，[22] 同じ趣旨によるブックレット・シリーズの発刊さえ日程にのぼっている。[23] これらの資料をも咀しゃくし，文献紹介のレベルをこえた，図書館学，教育学双方からの検討に耐える，"私のライブラリー・カレッジ" を提示できる日を俟ちたい。

1) ここでは，日本教育学会・大学教育研究委員会の発足と，現在の広島大学・大学教育研究センターの前身大学問題調査室の設置を念頭においている。
2) 海後宗臣. "大学教育の課題," *Energy*, vol. 6, no. 1, 1969, p. 44-46.
3) 今田竹千代. 大学改造論. 開発社, 1972, 292 p. 今田氏は "学問を志すものには，すべての学生や研究者に学問研究のための実際的方法としての図書館学（この名称は一考を要する）を課すべきである。したがって教員や学生と司書との間の壁を取り除いて，各々が交錯し合い，教員であると共に司書であり，司書であると共に教員であることが必要なので

ある″ (p. 218-219) と主張している。

4) 佐藤貞司. 〝ライブラリー・カレッジ——大学教育と図書館,″ **丸善ライブラリーニュース**, no. 100, 1975. 3., p. 4-5. 筆者は, 〝今日の大学が改革されなければならない多くの要因をもっていること, その附属機関としての図書館もまたそうであり, 〝大学の教員研究活動の重要な機関″・〝大学の心臓″ とされながらも, 〝学生不在の図書館, 教員から信頼されない図書館は実に多い″ のが実情だという。ひとりのライブラリアンとして, また, 大学構成員のひとりとして, このような大学図書館を改革してゆかなければならぬ課題を負うているのであるが, その基点・方向は, (中略) 〝学生の学習権を真に保障する大学教育のあり方は何か″ という課題に応える, 大学の教育そのものに深くかかわり, 最大奉仕対象者である学生から不可欠な施設・機関という認識・評価を獲得してゆくところにはないであろうか。このような観点にたつとき, ライブラリー・カレッジ思想・運動を検討・理解し, 批判的に摂取しておくことの意義が認められるのである″ とした。

5) *Library-college omnibus;* an interdisciplinary chronicle of educational events, vol. 8, no. 2a, June, 1975, p. 1.

6) *Library-college omnibus*, vol. 7, no. 1a. 1974, p. 1. なお, この学位論文を作成したGrolia Terwilligerについては, 藤田豊氏が言及している。*Library & information news*, no. 3, 1975. 7, p. 66 (12). また, R. Jordan から筆者への私信によれば, この論文は近く公刊の予定であるという。

7) 酒井美香子・高祖玲子訳. 〝ライブラリー・カレッジ——図書館と教室の融合″ **現代の図書館**, vol. 6, no. 1, 1968, p. 11-22.

8) 杉本冨士夫. 〝ライブラリー・カレッジをめぐって——その提起する諸問題と意義,″ **私立大学図書館協会々報**, 60, 1973. p. 53-63.

9) 佐藤貞司. 研究ノート: ライブラリー・カレッジ——大学図書館と教育についてのひとつのケース・スタディ″ (昭和 49 年度第 1 期東京大学図書館情報学セミナー・レポート)。本稿は, ライブラリー・カレッジ思想成立の背景(2 章), 運動史(3 章), 批判と反響(4 章)についての粗略なスケッチにおわっており, ライブラリー・カレッジ思想, 運動の内容そのものの把握・評価という本来の目的を達成していない。なお, 註 4) で挙げた文献は, このノートの要約ともいえるものである。また, このレポートは, 同セミナー研究集録に収載される予定であるが, 現在のところ未刊である。

10) i) Jordan, Robert. Library-college bibliography; selected, annotated, arranged chronologically. <*The library-college;* contributions for American higher education at the Jamestown College Workshop, 1965, ed. by Louis Shores, R. Jordan and John Harvey. Drexel Press, 1966.> p. 266-277. (Appendix D)

ii) Mills, Charlottee H. 〝Toward a philosophy of academic librarianship; a library-college bibliography, part I-III,″ *Library-college journal*, vol. 3, no. 3; vol. 4, no. 1; vol. 4, no, 3.

iii) Ellison, John W. 〝A library-college reader,″ *The library-college omnibus*, vol. 5, no. 3a, Dec., 1972.

i) は 1965 年現在, ii) は 1969 年現在で作成されており, 註 9) に挙げた論文に付した Appendix I. Bibliography on 〝Library-College″ は, この両者をベースに 1974 年 9 月現在で集約したものである。なお, iii) は筆者未見である。

11) 当誌は Library-College Associate, Inc. (Norman, Oklahoma) の刊行する季刊誌で, 4 巻 3 号 (summer, 1971) までは, *The library-college journal:* a magazine of educational innovation (創刊: 1968 年冬季号) と称していたものである。巻号は継承しているので, 本稿ではすべてを *Learning Today* として扱った。が, 書誌的データの記載には *L. T.* および *L-C. J.* の略記号を用いた。なお, 当誌は, 筆者の属する北海道教育大学附属図書館がバックナンバーを所蔵している。

12) Shores, Louis, 〝The library arts college; a possibility in 1954?″ *School and society*, vol. 41, no. 1048, January, 1935, p. 112. なお, この論文は, 註 10) の i) で挙げた *The library-college*, ed. by L. Shores et al, 1966, p. 3-9 に収録されている。また, 管見のかぎりでは, 同書は, ライブラリー・カレッジに関する唯一のモノグラフである。

13) Shores, Louis. 〝The library-college idea,″ *Library journal*, vol. 91, Sept. 1, 1966, p. 3871.

14) Shores, Louis. 〝A philosophy of librarianship,″ *Library and information science*, no. 9, 1971, p. 39-48.

15) なお, Shores, Louis. 〝A library-college decaloge,″ *Catholic library world*, vol. 42, no. 3, Nov., 1970. p. 153-160 は, 彼の最も新しいライブラリー・カレッジ思想を展開している必読論文である。

16) 1960年代の, アメリカのさまざまな大学改新を後援した U. S. Office of Education は, その成果を New dimension in higher education と銘打つ一連の booklet シリーズで公表している。このなかで independent study に関するものとしては次のものがある。

i) No. 1. *Independent study*, by W. R. Hatch and A. Bennet. (1960)

ii) No. 7. *Quest for quality; some models and means*, by Samuel Baskin. (1961)

iii) No. 13. *Approach to independent study*, by W. R. Hatch and A. L. Richards. (1965)

いずれも国立国会図書館が所蔵している。

17) Lohrer, Alice. "The impact of independent study on school libraries as media centers," *Library and information science*, no. 9, 1971, p. 231-243. を参照のこと。

18) Wedemeyer, Charles A. "Independent study; overview," <*Encyclopedia of education*, vol. 4, 1971,> p. 548-557. は, この間の事情を知るうえで役に立とう。

19) P. B. Knapp とライブラリー・カレッジの関係については, 註 9) に挙げた筆者の論文において, "1960 年代とモンティース・カレッジ図書館実験計画" なる一節 (第 2 章 3 節) をもうけて紹介した。さしあたり, 彼女の *The Monteith College Library experiment*. New York, Scarecrow Press, 1966, 293 p. を参照のこと。

20) Norman Beswick は, 次の二つのレポートで「ライブラリー・カレッジ」をイギリスに紹介している。このような性格から, われわれにとっても, これに対する理解をうるうえで資するところ大であろう。

i) "The 'library-college' the 'true university'?" *Library Association record*, vol. 67, no. 6, June, 1967. p. 198-202.

ii) "Library-college, re-visited, *Library Association record*, vol. 72, no. 4, April, 1970, p. 148-149.

21) ライブラリー・カレッジに対する批判は, 註 8) で挙げた杉本冨士夫氏の紹介しているもののほか, 次の 3 件があげられよう。

i) Blake, F. M. "The library-college movement; dying of old age at thirty, a personal view," *Wilson library bulletin*, Jan. 1970, p. 560-562.

ii) Blake, F. M. "The library-college movement," *Drexel Library quarterly*, vol. 7, nos. 3-4, July-Oct. 1971, p. 175-188.

iii) Bechtel, J. M. "A possible contribution of the library-college idea to modern education," *Drexel Library quarterly*, vol. 7, nos. 3-4, July-Oct., 1971, p. 189-201.

22) *The library-college experimenter;* a clearing house, vol. 1, no. 1, Feb. 1975, これは loose leaf 方式で, 現在のところ 2 号まで刊行されている (年 3 回刊)。

23) The Library-College Associates, Inc. は *Learning for living* とタイトルづけられた booklet シリーズの刊行を準備中で, その第 1 号は, Ⅱの 5) で紹介した T. E. Robinson が執筆の予定という。(*The library-college omnibus*, vol. 8, no. 1a, p. 1. 参照)